

片田舎にあった話

小川未明

青空文庫

さびしい片田舎に、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

ある日、都にいるせがれのところから、小包がとどいたのです。

「まあ、まあ、なにを送つてくれたか。」といつて、二人は、開けてみました。

中から、肉のかん詰めと果物と、もう一つなにかのかん詰めがはいつていました。

「これは、おいしそうなものばかりだ。」といつて、二人は喜びました。

夕飯のときには、おじいさんは、「どれ、せがれが送つてよこした、かん詰めを開けようじゃないか。」と、おばあさんにいいました。

おばあさんは、三つのかん詰めを膳のところへ持つてきて、「どれにしましようか。」と、おじいさんにたずねました。

「そちらの小形の赤いかんは、なんだろうな。」と、おじいさんは、いいました。

おばあさんにも、よく、それがわかりませんでした。

「なにか、外国の文字が書いてありますか……。」といつて、おじいさんに手渡しました。

おじいさんも、手に取つてみたが、やはりわかりませんでした。

「どんなものか、これをひとつ開けてみよう……」といいました。
 たとえ、年を取つても、やはり、珍しいものにはいちばん興味を覚えるものです。

おじいさんは、そのかんのふたを開けました。すると香ばしい
 かおりがしたのです。

「粉じや、なんの粉だろう……。」と、頭をかしげました。

こんどは、おばあさんが、その赤いかんを取つて、香いを嗅い
 だのであります。

「おじいさん、これは、やはり麦を挽いた粉ですよ。うちのせが
 れは、子供の時分から、不思議な子で、こうせんが大好きだつた
 から、こんなものを送つてよこしたのですよ。」と、おばあさん

はいいました。

「飯にでもかけて食べるのかな。」

「きっと、そうするのでございますよ。」

おじいさんと、おばあさんは、その赤黒い粉を飯にかけて食べました。しかし、その香いほど、あまり、うまくはありません。

「砂糖をまぜなければならぬだろう。」と、おじいさんがいいました。

「これは、子供の食べるものですね。」と、おばあさんはいいながら、立つて、砂糖を持つてきました。そして、二人は、飯にかけて食べました。

夜になつて、二人は、いつものごとく床につきました。けれど、

どうしたことか、目がさえて眠れませんでした。

「ああ、こうせんを食べたので、胸がやけたとみえて眠れない。」

と、おじいさんがいいますと、

「外國のものは、体に合わないから、食べるものでありませんね」と、おばあさんは、答えました。

二人は、やつと眠りつきましたが、いろいろの夢を見ました。

おじいさんは、まだ元氣で、河へ釣りにいった夢を見たり、おばあさんは、まだ若くて、みんなと花見にいったことなどを夢に見ました。

翌日、二人は、あの赤いかんの中の粉を捨ててしまおうかと話をしていました。そこへ、小包よりおくれて、せがれから、

手紙がとどきました。

その手紙によると、赤いかんにはいつているのは、ココアとい
うものであることがわかりました。田舎に住んでいるおじいさん
や、おばあさんには、まだそうした飲み物のあることすら知らな
かつたのです。

「こんなものを、なんで私たちが知ろうか。」といつて、おじい
さんと、おばあさんは、顔を見合させて笑いました。

—一九二六・一一—

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

※表題は底本では、「片田舎 『かたいなか』にあつた話 『はなし』」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

片田舎にあった話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>